



Title	事例研究についての一考案
Author(s)	由井, 紀久子
Citation	阪大日本語研究. 1997, 9, p. 37-49
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9367
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

事例研究についての一考察

Notes on Case Studies

由 井 紀久子

YUI Kikuko

キーワード：事例研究 一般化 科学性 日本語学習者言語研究

0 はじめに

日本語研究の中には数千から数万におよぶ多量のデータを収集分析し、帰納的に規則を導出する方法がある。一方、少量のデータを詳細に分析していく方法もある。日本語教育学においてはこの両方の方法が研究対象によって選択され用いられている。しかしながら、量的にいうと1例あるいは極少数例のデータを扱う研究である「事例研究（ケース・スタディ）」については、ある限られたデータから結論を導くことなどを主な理由として、科学性の観点からその妥当性について十分な認知が得られない場合もある。

小稿では日本語教育学における事例研究について考察するために、雑誌『日本語教育』に過去5年間、すなわち1992年から1996年までに掲載された論文のうち、特に非日本語母語話者の日本語習得に関する事例研究に該当するものを取り上げ¹⁾、研究対象としての事例の選出、および事例から導き出される結論へ向けてのデータ処理と分析の過程を中心に扱い、事例研究の意義と問題点を再考していきたい。その際、事例研究であっても論文の主目的が学習者の日本語習得以外のもの、例えば、ある教室の事例であっても教材そのものの有効性に焦点が当たっている論文は小稿では取り上げていない。

1 事例研究とは

上では事例研究を量的にいうと1例あるいは極少数例のデータを扱う研究だと述べた。確かに事例研究の第1義的规定を量的な多少でもって行なっているものもある。社会学の佐藤(1992)では、サーベイと事例研究を並立させて論述している。事例研究は調べられる事例の数は少ないものの、対象を通して調べられる項目の数は多く、一方、サーベイは調べられる事例の数は多いものの、対象を通して調べられる項目数は少ないという違いがある。しばしば事例研究は事例が少ないから一般性と妥当性が少なく、非科学的であるというイメージがもたれるが、これは「対象を調べること」と「対象を通して調べられること」との混同に基づいている、つまり、双方とも本来、対象そのものを理解しようとしているだけでなく、対象を通してもっと一般的な問題についての理解を深めようとしていると述べている。

また、心理学の吉村(1989)もやはり対象の数が少ないことを事例研究としたうえでその有用性を論じているが、ここでは「事例研究法」は1つの研究方法として捉えられている。心理学分野で事例研究の発展に大きな役割を果たした行動主義者Skinnerの提唱した「Small-N 研究」は、小標本であることを積極的に利用しようとするものであり、1個体から得られる定量的データを扱うために、A-B-Aデザインと呼ばれる実験デザイン、すなわち「まず、何らの処置もほどこさない状態でその行動の生起頻度のベースライン測定(A)を行なっておき、処理条件を加えたとき(B)どの程度の頻度変化が生じるかを観測する。そしてまた、ベースライン状況に戻り頻度を計量する(A)」手続きが採られる。Small-N 研究とは、一般の事例研究が受けている科学主義からの批判を克服し、その上、単一被験者からのデータである面を積極的に評価、利用しようとする研究方法であると述べている。

一方、Nunan(1992, 1996)は第2言語習得における事例研究とは何かを定義することは意外に難しく、つまり、1個人が対象になるだけでなく、1

クラス、1つの学校、あるいは1つの地域が対象になることもあり、事例研究とは何かを言うよりもむしろ、事例研究ではないとは何かを言うほうが簡単な場合もあると指摘している。Nunan(1992)は教育学における事例研究の重要な位置を占めているAdelman, Jenkins & Kemmis(1976)の叙述を引用し、「bounded system」の概念を導入し、事例研究を定義づけている。つまり、なんらかの境界が認められることを条件としている。Nunanのグロッサリーに纏められた事例研究の定義は次の通りである。

(1) case study (Nunan 1992)

The investigation of the way a single instance or phenomenon functions in context. In applied linguistics, it usually involves the investigation of the language behaviour of a single individual or limited number of individuals over a period of time.

この記述から分かるように、Nunanも単に事例研究を研究対象数で規定するのでなく、コンテクストとの関連で、縦断的に研究することとしている。縦断的研究と事例研究をほぼ同一視する立場にはLarsen-Freeman & Long (1991)の「A longitudinal approach (often called a case study in the SLA field) typically involves observing the development of linguistic performance, usually the spontaneous speech of one subject,…」との記述もあり、応用言語学研究の方法論としての事例研究を考えると、量と方法の両方を考慮に入れるべきであることが分かる。

小稿でも事例研究を単に研究対象の量が限られている研究であることの他に、研究方法も自然な談話収集を目指したものとしたい。つまり、事例の量が1例～数例の研究(単にインフォーマントの人数だけでなく、クラスを1単位として見た場合の数が限られたものも含む)、または、縦断的観察研究を事例研究とする。その際、データを定量的に処理するものも定質的に処理するものも取り上げることにする。

なお、事例研究をいう場合、特に心理学研究においては特殊事例研究を目指す場合もある(吉村1996)が、日本語教育学においては特殊事例から

一般化を引き出す研究はまださほど行なわれていないようである。

2 日本語教育学における事例研究

次に本節では、過去5年間の雑誌『日本語教育』に掲載された論文を通して日本語教育学における事例研究を考察してみたい。まず、どのように研究対象である事例、すなわちインフォーマントを選んだかという観点から問題点を探っていくことにする。

2.1 データの選出

先に、量または方法によって事例研究を規定すると述べたが、本節ではまずデータの分析処理の方法にかかわらず、数量的に限られたデータを扱う論文を取り上げ、どのようなインフォーマントが選ばれているかを見してみる。上でも述べた通り、いくつまでが少数かと決定するのは難しい。小稿ではとりあえず15対象までとする。16以上であっても1単位の対象と考えている場合は、取り上げている。言い換えれば、1クラスからデータを取り、統計処理を施して結論を導くタイプのものなども含んでいる。

該当する論文としては、単にインフォーマントの人数のみが少数例のものだけでなく、クラス単位で調査を行なっているものでクラス数が少ないものも取り上げているが、該当する31本の論文を見てみると、目立って多いのが自らの勤務先大学のクラスの学生をインフォーマントにする場合である。日本語教育の場合、調査者自身が教室を持っていることが多く、当然選ばれる事例となろうが、結論の導き出しかたによっては注意が必要になる場合がある。特に帰納的推論で結論（普遍的命題）を導出する場合、当該事例がそれが属するカテゴリーの代表例かどうか、吟味する必要があるだろう。偏った事例から一般化を行なうとすれば、誤った命題へと進む過剰一般化(overgeneralization) (楠見1996) の恐れがある。たまたま得られたインフォーマントである場合、それが属するカテゴリー内一例えば、初級日本語学習者、中級日本語学習者というカテゴリー等一での位置付けを

する必要があるように思われる。安易にデータの属性、つまり初級である、あるいは、母語は何々語であるなど、だけを記述するだけでなく、そのカテゴリ内での特性についても同時に記述するべきだろう。例えば、学習者の個人的要因なども日本語習得においては重要な要因になるので記述に加える必要があると思われる。

また、もう1つの問題として、事例を収集する際、過剰一般化のほかに利用可能性(availability)ヒューリスティック(楠見1996)の問題もある。楠見によると人は、想起しやすい事例だけを収集する傾向があるということである。例えば、芸能人夫婦の離婚率と一般夫婦のそれを比較するとき、芸能人夫婦の離婚事例が思い出しやすいために、その離婚率を過大評価する傾向があるということである。これを日本語習得研究で考えれば、例えばある形態素の習得が困難な場合、たまたま自分のクラスのB語母語話者がそれに該当するからといって、B語母語話者だけをデータとして考えると、利用可能性ヒューリスティックの問題に関わろう。何かの問題を調べるときに、想起しやすい例だけに偏っていないかどうか注意することが大切だと思われる。

次に、データである事例から結論を導き出すデータ処理と分析過程をみていく。

2.2 分析処理

1節での事例研究の規定では、データ処理を量的に行なうものと質的に行なうものがあると述べたが、ここでは結論へ至る過程を取り上げるので、定量的な方向を志向する研究と定性的な方向を志向する研究とに分けてみていきたい。

まず、定量的な処理を志向する研究だが、調べた論文ではこのタイプが圧倒的に多く、該当する論文は27本であった。データを何等かの単位で分析し、その数を調べることによって、傾向を探るタイプである。少数例を定量的に分析するには、調査のデザインを十分に吟味する必要があると思われる。Nunan(1992)では1事例研究について、特に教育学あるいは心理

学のA-B-A-Bデザインを取り上げているが、定量的に少ない対象のデータを処理する場合、有効になることもあろう。つまり、最も少ない数の1事例研究の場合、最大の欠陥は1つの事例から得られた結果が他の事例に当てはまる保証がないこと（バーロー他1988）であり、それをカバーするためにも厳密なデザインが必要となる。この場合、何も手を加えないである行動の生起頻度を観察するベースライン測定（A）を行なっておき、処理条件を加えたとき（B）どの程度の頻度変化が生じるかを観測する。そしてまた、ベースライン状況に戻り頻度を計量し（A）、さらに介入を繰り返す（B）というデザインが採られる。日本語教育において教室での教師のどのような言語行動が有効に働くかを調べるような研究の場合、応用が効くと思われる。ただし、日本語学習者の日本語は変化し続けるのであり、それぞれの間に時間的隔たりが大きいと測定は困難になろう。

一般的に言って、データの定量化に当たって重要になるのは、数値を取る単位を設定することであり、日本語そのものに焦点が当たっている場合と、言語行動に焦点が当たっている場合とでは設定のしかたは変わるであろうが、まず、詳細な観察からはじめるのが有効だと思われる。

次に、定性的なデータ分析について考えてみたい。調査した論文中これに該当するのは、事例研究の典型ともいえるにもかかわらず、意外に少なく3例のみであった。この分野の研究は今後発展していくのではないかと期待される。

現在、第2言語習得論にも大きな影響を与えている言語論の大きな流れには次の2つがあると思われる。ソシュールを始点としシステム・構造として言語を捉らえる記号論的視点と、[後期]ウィトゲンシュタインを中心とし行為・コミュニケーションとして言語を捉らえる言語使用論的視点（立川他1990）の2つの立場である。日本語教育学においては、例えば前者の影響を受けて学習者の母語と日本語との対照分析研究が発展し、後者のほうではコミュニケーションアプローチが主張されるようになった。定性的データ分析は、後者の研究に属する。例えば、ネウストプニー(1994)ではプラグマティックなデータ収集を強調している。この立場での研究は個

々の事例のプラグマティックな文脈上での分析が前提となろうが、その科学性という観点から、批判されることも多い。記述には文脈の特性が不可欠であろう。ところで、他分野、例えばサル学では反証としての事例研究の重要性を述べているものもある。この場合、詳しい根拠づよい観察分析によって既存の命題を反証することもあるからである（浅田他1986）。反証可能性については次節でもう一度考える。

3 事例研究の妥当性と科学性

小稿のはじめに、事例研究の結論に対しては科学的観点から妥当性について十分な認知が得られない場合があると述べた。他の研究分野でも当然ながら同様の問題があるが、心理学分野におけるこの種の批判に内在する重要な問題点として吉村(1989)は次の4点をあげている。

- (2) [1] 小標本（サンプルの代表性が保証されない）
- [2] 定性的データ中心（特に主観性の強いデータ）
- [3] 事後研究（独立・従属変数の未決定性）
- [4] 被験者主導型研究（条件統制、操作がされていない）

これらの問題点すべてが日本語教育学に属するすべての研究にあてはまることはないだろう。心理学は哲学からの独立を目指し、その反動として生理学、あるいは推測統計学から大きな影響を受けている（吉村1989）。ここから実験的な統制、変数が強調されることになる。日本語教育学の中でも実験的に分析する研究、例えば音声実験などではもちろんこれらは重要な関わりがある。

一方、日本語教育学はその名をIC分析（直接構成素分析）すると「日本語+教育学」と「日本語教育+学」の2通りに分析できるように、教育学の下位分野としての日本語教育学と日本語学の下位分野としての日本語教育学がある。前者の場合、教育学的研究方法は多分に心理学の影響を強く受けているので、(2)のすべての問題点が当てはまろうが、後者の場合、必ずしもすべての研究で実験統制や実験的変数は強調されるわけではない。

また、定性的データについても必ずしも否定されるものではなく、上で述べたように、逆にそれを目指すこともある。大阪大学の日本語教育学（応用日本語学²⁾）の場合、後者の立場で日本語学講座に属しているので、日本語学の下位分野としての日本語教育学の立場で本節を論じていく。

3.1 科学性について

研究の妥当性を問うとき、人の中には判断基準としての科学性があるだろう。例えば、「近代科学の知」と対立させて「臨床の知」を論じる中村(1992)は、近代科学を成立させる要因として<普遍主義><論理主義><客観主義>をあげている。（これに対立させて臨床の知としては<コスモロジー><シンボリズム><パフォーマンス>を立てている。）これらの特徴を有する科学を科学たらしめるものの1つとして、ポッパールの反証可能性がある。これは科学と非科学の境界化基準としてあげた特性である。つまり、ある理論あり言明なりが科学的なものであるためには、反証可能なもの、あるいは同じことだが、反駁ないしテスト可能なものでなければならない（関1990）ということである。

日本語教育学の事例研究において、特に定量的分析を志向する研究は上にあげたような意味での信頼度と妥当性が問われるであろう。Nunan(1992)は事例研究リサーチにおける信頼度と妥当性について、Stake(1988)とYin(1984)の論述を紹介しながら、この問題について吟味している。信頼度と妥当性を事例研究にも適用すべきかどうかは意見の分れるところであり、Stakeは事例研究以外の研究は個々の例の独自性を無視し、特例を超えて一般化するが、事例研究は特定の事例の特異性、複雑性を探究することから、ある条件が他の条件を導くよう示される因果関係を確立しているかという内的妥当性のみ必要で、その研究結果が一般化されうる領域あるいは群を確立しているかという外的妥当性は重要でないとする立場である。一方、Yinは他のタイプの研究同様に、事例研究にとっても信頼度と構成的・内的・外的妥当性は重要であるとする立場である。また、これらの中でも特に構成的妥当性が特に重要だとしている。

Nunanは事例研究を行なう際の大きなバリアは、調査事例を超えてどの程度まで結論が一般化されるかということに関わっており、例から一般化するという問題は、この問題を扱う高等数学の一分野があるほど複雑であることを主張している。Yin の立場は事例研究について「統計的」一般化ではなく、「分析的」一般化を主張しているが、これはポッパーの反証可能性を想起させ、その結果として、1つの反例は与えられた仮説や主張を論駁するのに十分であるとの考えのもとに、ある仮説や主張の反証のための道具としては、事例研究は適切であると議論していることになるとNunanは批判している。

Nunanのいうように反証のためだけに事例研究があるとはいえないが、上述したように、日本語教育学の研究論文の最後で自己評価や今後の課題を述べる部分には「事例を増やして結論が正しいかどうか検証していきたい」というように、帰納的推論でもって一般化へ導くその入口として事例研究を認識している文献も少なくなく、特に定量的に分析する場合、これを全否定するべきではないとも言える。また、上にも述べたとおり、定性的な分析の場合、事例研究が詳しい、厳密な観察分析によって既存の命題を反証することもあるのである。

3.2 近代科学の相対化と事例研究

前節ではポッパーの反証主義、および論理実証主義的な検証主義を基盤とする近代科学との関わりで事例研究について概観した。本節では近年しばしば論議される近代科学の相対化（浅田他1986）、あるいは新しい知のシステムである「臨床の知」構築の試み（中村1992）ように、近代科学からの脱却、転換の方向との関わりから、特に定性的にデータを扱う事例研究を考えてみたい。

質的データ処理型分析の事例研究の場合、もちろん量的データ処理型分析の場合も、全てが一般化を目指さなくてはならないだろうか、という問題が起こる。先に近代科学の知の構成要素として中村(1992)による<普遍主義><論理主義><客観主義>、およびそれに対立する臨床の知として

<コスモロジー><シンボリズム><パフォーマンス>をあげた。これらが行なう思考は科学の知は「抽象的な普遍性によって分析的に因果律に従う現実にかかわり、それを操作的に対象化」する「冷やかなまなざしの知」であり、「視覚独走の知」であるという。一方、臨床の知は「個々の場合や場所を重視して深層の現実にかかわり、世界や他者がわれわれに示す隠された意味を相互行為のうちに読み取り、捉らえる働きを」し、「諸感覚の協働にもとづく共感覚的な知」であるとしている（以上、中村上掲書）。

事例研究の結論を一般化へと導くのも確かに重要な仕事であるが、事例のもつ文脈（中村のことばでは「場所（トポス）」に対応すると思われる）にもっと注目してもいいのではないかという考え方が提出できる。1つ1つの事例は、その属するカテゴリーとの関係で考えれば、有機的に繋がりがあり、その繋がりが領域に意味を産み出すとも言える。このような一回性、個性的、現場性を重要視する観点にたてば、たとえ1事例であっても、帰納的推論の前提としてのみ機能させるのではなく、新たな発想を得るためのデータとしても機能できるはずである。KJ法の川喜多（1967）はアブダクション（仮説的推論）を「発想法」と名付けて、観察重視の仮説発想的、総合的科学を「野外科学」と称している。ここでは同質化されたデータ群を要約分析するのではなく、異質なデータを統合し、新たな分類枠を創りだすことをも目指している。事例研究にはこのような観点からの分析も可能であると思われる³⁾。そのためにはいくつかの事例のセットを絶え間ない努力のもとに作っていくことが必要となるが、事例研究の積極的意義としてアブダクション的研究も可能ではないかと考えている。ただし、現在のところ、論文の中で論証していく過程は論証主義から離れると、誤解されるのではないかとさえ言う。

さらに、データの文脈に注目するということは、当該文脈を成立させている全体的体系との関わりの中で文脈を捉らえることになるので、単にその文脈だけを見ているのではないことになる。データを通して全体を見るという態度も事例研究には必要になってくるのではないだろうか。

最後に、中村のいうパフォーマンスにも関わると思われるが、複雑な要因が絡みあっている日本語習得においては、個人レベルの情報を使って語ったほうがむしろ効率的であるような場合もあり、「情報の圧縮」（浅田他1986）でもってより効果的に事実を伝えることができるとも言えるのではないだろうか。個人レベルの事例を詳細に記述する（ものがたる）ことで、日本語教育に関わる読者に問題を訴えることもできると考えられる。もちろん、その際、ただ散文的に記述するのではなく、いい枠組みでもって記述しないとその分析は困難になるだろう。もし、散漫な記述でしかなかったら、その研究には「意味」が見いだせないのではないかという評価、すなわち、全く恣意的な分析である、あるいは何も見えてこないという評価を受けることになるだろう。

十分に科学性が吟味されていない段階のまま、反証主義や論理実証主義を安易に超えてしまうのは慎むべきではあるが、（近代的）科学性に拘泥するあまり、大切なものを見落すのも大きな問題であろう。

4 むすび

以上、日本語教育学における事例研究について科学性との関わりで考察してきた。事例を選出するに当たっては、それが属するカテゴリーとの関係から、単純に代表として扱うことには注意を払う必要があることを述べた。また、事例が属するカテゴリーの特徴として結論を導く場合、個人的要因など詳しく記述する必要があることも指摘した。また、分析処理に当たっては事例研究の持つ一回性、現場性、個性を除去するか、重視するかで方向が分かれることも述べた。それらを除去して考えるならば、すなわち帰納的推論で結論を導くならば、研究のデザインを十分に吟味する必要がある。また、一回性、現場性、個性を重視するならば、近代科学を相対化させた立場を取り、厳密に文脈を記述して行く必要を述べた。その際、表層的な現象だけでなく、事例を通して全体を見るという態度が必要になる。複雑な要因が絡んでいる日本語習得においては、個人レベルの情報に

徹して語る方法もありえることも指摘した。

上で取り上げた事例研究はその方法においてすべてのタイプの研究を取り上げたとはいえない。特に統制を必要とする研究については十分に論及できなかった。また、個々の例を詳しく述べる必要もあったかと思うが、全体的にしか、捉らえ論じることしかできなかった。

言語研究についての筆者の個人的見解としては、システム・構造として言語を捉らえる記号論的視点から発展してきた言語、言語習得研究の後に、行為・コミュニケーションとして言語を捉らえる言語使用論的視点が入り込まれたこともあって、両者が自らの立場を極端に主張していた時期がこの20年くらいだったように思う。新しい立場や主義の黎明期にあつては極端な発言、主張が必要だということは十分理解できるが、それぞれの立場が認識されている現在にあつては、そろそろ、その統合的な視点もでてきてもいいのではないかと思われる。鳥からもケダモノからも友達とは看做されないコウモリは日和見で優柔不断かもしれないが、ツグミヤツバメ、あるいはトラやライオンだけを見ては陸上動物を全体的には語れないだろう。言語を全体的に捉らえるには記号論的視点もプラグマティックな視点も必要だと思うが、それらを統合する1つの試みが近年取り上げられる認知言語学の理念に含まれていると考えている。

注

- 1) 日本語教育学には取り上げた『日本語教育』のほかにも事例研究が含まれる重要な雑誌があるが、小稿では学会誌ということでこれを日本語教育学研究カテゴリーに属する研究の代表例として採用した。
- 2) 大阪大学の日本語教育学については、大学改革の結果、学部教育のシステムと教官の所属システムは1996年度現在、応用日本語学が日本語学講座内に存在している。大学院の教育システムは日本語教育学の名で日文学専攻の1研究分野として存在している。
- 3) これは第2言語習得研究においては民族誌的研究を想起させる。民族誌的研究と事例研究の違いについては、Nunan(1992)を参照のこと。

データ収集に使った文献：日本語教育学会『日本語教育』76号（1992年）～90号（1996年）

参考文献

- 浅田彰・黒田末寿・佐和隆光・長野敬・山口昌哉(1986)『科学的方法とは何か』中央公論社
- バーロー, D. H. & M. ハーセン(1988(原書1984))『一事例の実験デザイン—ケーススタディの基本と応用—』二瓶社
- 市川伸一編(1996)『認知心理学4 思考』東京大学出版会
- 河合隼雄(1994)『河合隼雄著作集11—宗教と科学—』岩波書店
- 川喜田二郎(1967)『発想法—創造性開発のために—』中央公論社
- (1973)『野外科学の方法—思考と探検—』中央公論社
- 楠見孝(1996)「帰納的推論と批判的思考」市川編所収
- Larsen-Freeman, D. & M. H. Long (1991) *An Introduction to Second Language Acquisition Research*. Longman.
- 中村雄二郎(1992)『臨床の知とは何か』岩波書店
- ネウストプニー, J. V. (1994)「日本研究の方法論—データ収集の段階」『待兼山論叢日本学篇』28号
- Nunan, D. (1992) *Research Methods in Language Learning*. Cambridge University Press.
- (1996) “Issues in Second Language Acquisition Research: Examining Substance and Procedure”. In W. C. Ritchie and T. K. Bhatia (eds.) *Handbook of Second Language Acquisition*. Academic Press.
- 佐藤郁哉(1992)『フィールドワーク—書を持って街へ出よう—』新曜社
- 関雅美(1990)『ポパーの科学論と社会論』勁草書房
- Stake(1988) “Case Study Methods in Educational Research: Seeking Sweet Water”. In R. M. Jaeger(ed.) *Complementary Methods for Research in Education*. Washington, D. C. :American Educational Research Association.
- 立川健二・山田広昭(1990)『現代言語論—ソーシャル フロイト ウィトゲンシュタイン—』新曜社
- Yin, R. (1984) *Case Study Research*. Calif. :Sage Publication.
- 吉村浩(1989)「心理学における事例研究法の役割」『心理学評論』32-2
- 編(1996)『特殊事例がひらく心の世界』ナカニシヤ出版